

大学の研究に対するMODの貢献

Contribution of MOD to Research of the Institute of Technology

和田精二（湘南工科大学）

1. はじめに

大学における研究の成果を社会に還元できるようなマネジメントの手法確立を目指し、「県立辻堂海浜公園・ユニバーサルカー研究」を立ち上げて2年半が経過した。（財）神奈川県公園協会との協働研究を県内のエンジニアリング会社との産学連携研究に連動させることで産官学連携研究体制を作った。研究と社会が積極的に接点をもち双方向に作用しながら進化する研究体制の仕組みづくりにMOD（Management of Design）を応用し、毎年繰り返す研究の循環ループが目標達成に向けて上昇していく研究の仕組みを構築しつつある。

2. 本研究の経緯

本研究は県立辻堂海浜公園に隣接する片瀬・鶴沼・辻堂地域における高齢化問題に着目、同公園プールエリアに多数のユニバーサルカー（障害者・高齢者・健常者のいずれもが使用可能なカー）を導入することでプールエリアをアウトドア・パワーリハビリ空間に変貌させる環境創造と実現性の高いビジネスモデルの創出を目指している。最初に提案したスタビライザー付カーは、市販カーに安定翼を装着することでカーの転覆を防ぐと共に障害者や高齢者のカーに対する潜在的不安を払拭できた。本研究は既にある公共の「箱物」の内、使用されていない施設を対象に大金を使わないで高齢時代に有益に機能するパワーリハビリ施設に変貌させること、その結果高齢者が楽しく運動することで医療費が下がり、ついでに関連ビジネスの起業ができないかというところに最大の興味がある。県立辻堂海浜公園のプールエリアの広大な敷地には、最大幅65mの波の出るプールや260m長の流れるプールなどが多数設置されており、夏の2ヶ月間に約12万人の集客を果たしているが、残り10ヶ月間は遊休施設と化しており、小中高校のプールを含む全国のプールの大半が同様の状況にあるものと推定される。ここにデザインの発想が機能できる対象を見出し得る。デザインはモノからコトの時代に変貌したと標榜されながら成果が上がらず、やがてトーンダウンしてきた現状に対して、コトを仕掛けモノのデザインの機会を作ろうというのも本研究の狙いである。県立公園のプール

エリアにユニバーサルカーを導入することを成功させることで、結果的にデザイン業務を生じさせ関連事業も成立させられないかという目論見を持っている。昨年、当該公園隣接地域の障害者2団体の支援を得て実施したカー試乗モニターにより、6通りのオプションを装着すれば、障害者・高齢者も使用可能なカーとしておおかたの諸問題をカバー可能であることが判明した。その結果、上記オプション開発と25mプール用短艇開発の連動が最大の研究課題となり、県内のエンジニアリング会社との本格的な産学連携が始動した。本研究の特徴は、プールを対象としていることから季節性という極めて明解なサイクルが存在することにある。具体的には、春と秋の基本スケジュールを設定すると連年同じサイクルの研究活動が可能になり、目標管理が容易となる。そのため、カー試乗モニターや年3回の展示会（横浜地区）を軸に毎年規則的な計画をたて、地域組織と連携して推進することが可能になった。

3. まとめ

当研究は1教員の能力を超えるため退職デザイナー等の研究室採用を大学に制度化願い実現させた。また、地域とのコミュニケーション機会、県内展示会への定期的発表、プレスリリース等を年間スケジュールに組み込むと共に学生と社会との接点強化による動機付けを意図して1-3年の造形教育にも同じテーマで連動実施、教育の立体化を図った。本研究は多様な領域にまたがっているため国立リハビリセンター、障害者団体・施設、障害者カー協会等との連携を重視、できるだけ多くの情報を集中管理するようにした（連携している組織数は現在15）。結果的に学外とのコミュニケーション量の増加と木目細かな対応が必要となるが、福祉関係をテーマとした以上、この問題は避けて通れないことを強く認識した。以上の経験は、企業において実施してきたMODがそのまま役にたつことを意味している。大学における研究の成果を社会に還元することを目標とすると、企業におけるMODの方法論がそのまま通用することを再認識できたことは今後の研究推進に大きな指針となっている。